

高校2年生における学習方略と自己効力感の獲得との関連

— 1年間の英語学習を通じて —

The relationship between learning strategies and acquiring
self-efficacy among 2nd year high school students
— through English study over the course of one academic year —

若海 由美*
Yumi WAKAUMI

尾崎 啓子**
Keiko OZAKI

【キーワード】高校2年生、英語学習、自己効力感、授業理解度

1 はじめに

筆者らは、高校生が抱えやすい不安やストレス要因について明らかにし、生徒が自らストレスに対する耐性を身につけていくために有効な支援を考えることを目的として、高校生と生活を共にする教師の視点を活かした調査研究を2011年から2014年にかけて行ってきた。この一連の調査結果から、高校2年生は、自己効力感の獲得及びその後の学習の成果において重要な学年であることが分かった。

2011年の調査結果では、高校2年生の特徴として、現実の生活で「勉強ストレス」があると友人に積極的に自己主張や相談をして問題の解決に向かうが、理想の行動では自ら行う積極的な問題解決を望みつつ、失敗に対する不安などを心配し、「経験」を有効なストレス・コーピングと考えていない傾向が見られた（若海・尾崎、2013）。そこで、2013年は、高校2年生の時期における自己効力感の形成に関して、友人に相談して問題の解決に向かうとするこの時期の生徒の特徴を生かしながら、授業（英語II）での「経験」を通じてのアプローチが可能ではないかと考え、1年間取り組んだ授業実践を基に、その可能性と効果について検討した。その結果、ペアワークの経験を通じて、2年生の時期の特徴を生かしつつ、生徒の自己効力感を向上させるきっかけ作りができた（若海・尾崎、2014）。

2014年の調査では、高校3年間の英語の授業の実践を通して、予習→授業→復習サイクル及び授業におけるペアワークの「経験」に基づく学習習慣の確立を軸とした学習方略と自己効力感の獲得との関連について、検討した。その結果、予習→授業→復習サイクルによる学習習慣の確立とペアワークという形での友人相談を中心とした活動を通じた3年間の英語学習経験の積み重ねの結果が生徒たちに自信を持たせ、自己効力感の獲得に有効であったことが検証された（若海・尾崎、2015）。

バンデューラ（A. Bandura）は、自己効力感を「外界の事柄に対し、自分が何らかの働きかけをすることが可

能であるという感覚」であると定義している。自己効力感の有効性について、野口（1999）は「バンデューラが提唱している自己効力感は、自信や意欲の効能であり、達成や対処への可能性である。力強い自己効力感をもつ人は、自分の能力をうまく働かせて困難に立ち向かい、さらにいっそう努力していくことになる」と述べている。

一方、自己効力感と学習との関連において、中西（2004）は、「自己効力感は、学習スキルを予測することも示唆されていることから（Schunk、1982）、自己効力感を高めることは学習場面においても有益であると考えられる」と述べている。このように、自己効力感の高まりは学習へもプラスの効果を与えていることが分かる。

2011年度から2013年度にかけて、3年間持ち上がった生徒たちとの3年間の授業実践（若海・尾崎、2013,2014,2015）における知見と経験、反省点を踏まえ、2014年度、高校2年生を担当することになった第1筆者の英語の授業では、高校2年生における学習方略と自己効力感の獲得との関連について、生徒たちの1年間の変化を検討した。この際、取組課題として次の2点を考慮した。第1に、若海・尾崎（2014）の2年生における授業実践では、1年間を通じて年度末の1回だけ生徒を対象にして授業に関する質問紙調査を行なったが、その際の課題として、年度当初と学年末の両方で調査を実施することで、授業方法の工夫が生徒の自己効力感の向上に与える影響についてより明らかにできるのではないかという点、第2に、若海・尾崎（2015）の調査結果で指摘した、高校3年間を通じ、段階を踏んだ質問紙調査を行うなどの工夫が必要であるという点である。この2点を踏まえ、本研究では、年度当初の4月、1年間の折り返し地点となる10月上旬、年度終わりの2月下旬の年3回、生徒たちに同じ質問紙調査を実施し、生徒たちの学習方略と自己効力感の関連について、1年間の変化を検討した。

2014年度も、第1筆者の授業では、まず第1に、基本的な学習習慣の確立の指導に努めた。具体的には、予習→

* 埼玉県立熊谷西高等学校／埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

** 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

授業→復習→予習→授業→復習……のサイクルを作り、学習習慣を確立するよう徹底して指導してきた。勉強が分からなければ生徒たちは授業が楽しいと感じられず、その結果自己効力感も低下すると考えたからである。

第2に、前年までと同様、授業の中で、ペアワークなど生徒たちによる活動を多く取り入れるように心がけた。他者と協力し合う「経験」を積むことで、「目標達成は自分だけの努力によるのではなく、周りの学生と協力しながら行っているものだということを体感させることができる」(廣森、2013)、この「経験」を英語学習以外の場面でも生かし、高校生活の中間である2年生の時期に人間的な成長も促したいと考えた。今回は、英語学習を通じての「自己効力感の向上」をより具体的に分析するために、「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」のどの力を特に伸ばしたいか、及びその力を伸ばすための努力についての質問項目を加えた。これらの分析により、2年生における学習方略と自己効力感の獲得との関連についてさらに細かい検討を行う。

2 対象

2014年4月：埼玉県内の県立高校2年生 82名。普通科1クラス41名(男子13名、女子28名)、理数科1クラス41名(男子27名、女子14名)。2014年10月・2015年3月：同高校2年生 78名。普通科1クラス39名(男子13名、女子26名)、理数科1クラス39名(男子25名、女子14名)。

3 方法

English Communication IIの授業を受講する2年生に、2014年4月、10月上旬、2015年2月下旬の年3回、英語の授業に関する記名式の質問紙調査を実施した。

4 English Communication IIの授業について

(1) 対象の英語の科目は、55分授業で週4回である。

(2) English Communication IIの授業構成

使用教科書は、CROWN English Communication II(三省堂)。

毎日の授業(予習復習含む)の流れは以下の通りである。

- ① 初見で辞書を使わずに新しいLessonを通して読み、本文の内容についてのTrue or False(T, F)クイズを実施。【予習宿題】
- ② 教科書準拠の予習ノートを使い、次の授業の予習をしてくる(単語・熟語調べ、本文の内容理解、既習文法の確認、新しい文法事項の確認等が網羅されている)。

【予習宿題】

③ 授業

(a)内容理解：単語・熟語の発音と意味の確認、本文のリスニング。その後、パラグラフ単位での本文の内容確認、新しい文法事項、難しい構文の入っている文についての説明。

(b)音読：音読は、内容理解後に行っている。教員の後について数回Chorus Readingをした後、生徒

全員を起立させる。隣同士でペアになり、one sentenceずつ交代で読む。2回目は読む順番を反対にして読む。2回読み終わったペアから座る。その後、ランダムで3〜4組を指名し、全員の前で読んでもらう。

(c)復習プリント【復習宿題】：Lessonの各Section毎に教員がオリジナルで作成。内容は、本文に関する英問英答、授業で出てきた単語や熟語の派生語や反対語の確認、類語や間違いやすい語法の説明、本文に出てきたものに関連した、入試に出やすいポイントの整理、熟語や構文を使ってオリジナルの英作文を書かせる、本文に出てきた内容(発音、アクセント、語彙、構文、文法などが主)に関する入試問題を発展問題として解かせる、新出の文法事項、分かりにくい構文などの構造についての再確認などを取り入れている。

英問英答については、隣同士のペアを活用。分からないところがあれば、生徒たちはペアの相手と確認し合ったり、2人とも分からなければ他のペアに聞いて、一緒に考えることも可能にしている。練習後、ランダムで指名、問題毎に違うペアに発表させる。

また、3学期からは、毎授業の最初に、5分程度で速読演習問題を実施している。

授業の主なねらいは、それぞれの生徒の自己効力感、「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」、及び成績の上昇である。

5 質問紙調査の結果

1年間の英語の授業における生徒の意識と行動の変化を検証するために、2014年4月、10月上旬、2015年2月下旬に質問紙調査を実施した。

質問項目は10項目である。選択肢は項目別に以下の通りで、項目1と項目9(2月のみ)は、「90%以上、89〜70%、69〜50%、49〜30%、30%未満」の5つから1つを選択とした。項目2は、「かなり上がった、上がった、変わらない、下がった、かなり下がった」の5つから1つを選択とした。項目3は、「予習・復習を中心に行った、予習はしたが復習はあまりしなかった、予習はあまりしなかったが復習はした、予習も復習もあまりしなかった、テスト前にしか勉強しなかった」の5つから1つを選択とした。項目4は、「とても力をつけたい、力をつけたい、普通、あまり力をつけなくてもよい、力をつけなくてもよい」の5つから1つを選択とした。項目5は、「とても力がついた、力がついた、普通、あまり力がつかなかった、力がつかなかった」の5つから1つを選択とした。項目6は自由記述方式、項目7と項目8は、「かなり効果的、効果的、普通、あまり効果的でない、効果的でない」の5つから1つを選択とした。項目10と項目11については、自由記述方式とし、最後に何でも書けるspecial cornerを設けた。

1) 英語の授業の理解度における自己認知について

4月→10月→2月と授業が進むにつれて、授業の理解度が「90%以上」の生徒が3.6%→6.4%→6.4%、「89%〜

70%」の生徒が13.4%→32.1%→35.9%と増えている。両方を合計すると、4月→10月→2月で、17.0%→38.5%→42.3%となり、英語の授業の理解度が上昇している。理解度が「69%～50%」の生徒は年間を通じてほぼ横ばいであるが、理解度が「49%～30%」の生徒は、35.4%→15.3%→12.8%と推移し、年度初めと比べると、2年生の最後ではほぼ3分の1に減少している。さらに、理解度が「30%未満」の生徒は、10月にはいなくなった。(表1参照)

【表1】Q1 1年生での/2年生前半の/2年生を終えての授業の理解度は自分ではどのぐらいだと思いますか。

	4月	10月	2月
90%以上	3(3.6%)	5(6.4%)	5(6.4%)
89～70%	11(13.4%)	25(32.1%)	28(35.9%)
69～50%	35(42.7%)	36(46.2%)	35(44.9%)
49～30%	29(35.4%)	12(15.3%)	10(12.8%)
30%未満	4(4.9%)	0(0%)	0(0%)
合計人数	82人	78人	78人

2) 英語の授業の理解度の変化における自己認知について

4月における授業の理解度の自己認知を基準として、理解度の変化を調べているため、この質問は4月の質問紙調査には入っていない。10月→2月と授業が進むにつれて、授業の理解度が「かなり上がった」と答えた生徒は授業の理解度が「90%以上」の層で80%→25%、「89%～70%」の層で16%→21.4%、「69～50%」の層で2.8%→2.9%となっている。授業の理解度が「上がった」と答えた生徒は「90%以上」の層で0%→50%、「89%～70%」の層で68%→67.9%、「69～50%」の層で77.8%→85.7%、かなり上がったと答えた生徒と上がったと答えた生徒を合計すると、「90%以上」の層では80%→75%、「89%～70%」の層では84%→89.3%、「69～50%」の層では80.6%→88.6%となっている。理解度が「49%～30%」の生徒では、10月には、理解度が上がったと答えた生徒と変わらないと答えた生徒が50%ずつであったが、2月には上がったと答えた生徒が100%になった。(表2-1, 2参照)

【表2-1】Q2-1 1年生の時と比べて、英語の授業の理解度は上がったと思いますか。

2年生10月	かなり上がった	上がった	変わらない	下がった	かなり下がった	合計人数
90%以上	4(80%)	0	1(20%)	0	0	5人
89～70%	4(16%)	17(68%)	4(16%)	0	0	25人
69～50%	1(2.8%)	28(77.8%)	7(19.4%)	0	0	36人
49～30%	0	6(50%)	6(50%)	0	0	12人
30%未満	0	0	0	0	0	0人
合計人数	9人	51人	18人	0人	0人	78人

【表2-2】Q2-2 2年生の授業を振り返って、英語の授業の理解度は上がったと思いますか。

2年生2月	かなり上がった	上がった	変わらない	下がった	かなり下がった	合計人数
90%以上	1(25%)	2(50%)	1(25%)	0	0	5人
89～70%	6(21.4%)	19(67.9%)	3(10.7%)	0	0	28人
69～50%	1(2.9%)	30(85.7%)	2(5.7%)	2(5.7%)	0	35人
49～30%	0	10(100%)	0	0	0	10人
30%未満	0	0	0	0	0	0人
合計人数	8人	61人	7人	2人	0人	78人

3) 予習→授業→復習……サイクルの確立について

4月では英語の授業の理解度における自己認知が、「90%以上」の生徒であっても、「テスト前にしか勉強しない」生徒(2人)や「予習も復習もあまりしなかった」生徒(1人)のみであったが、10月では、「予習・復習を中心に行っ

た」生徒(2人)、「予習はしたが復習はしなかった」生徒(2人)、「テスト前にしか勉強しなかった」生徒(1人)に変化し、2月には、理解度における自己認知が90%以上の生徒全員(4人)が予習・復習を中心に行っていると回答している。「予習も復習もあまりしなかった」生徒、「テスト前にしか勉強しなかった」生徒の割合が、4月→10月→2月と授業が進むにつれて、38人(46.9%)→11人(14.1%)→5人(0.06%)と劇的に減少した。特に、理解度「49%～30%」では、「予習はしたが復習はあまりしなかった」に大幅にシフトしている。「予習・復習を中心に行った」生徒の割合が、4月→10月→2月と授業が進むにつれ、2人(0.02%)→12人(15.4%)→17人(21.8%)と増加した。「予習はしたが復習はあまりしなかった」生徒の割合が、「予習・復習を中心に行った」生徒同様、4月→10月→2月と授業が進むにつれて、32人(39.5%)→52人(66.7%)→50人(64.1%)と、4月から10月の時点で1.5倍強増加した。(表3-1, 2, 3参照)

【表3-1】Q3 1年生の時の英語の勉強はどのように行っていましたか。

- 5: 予習・復習を中心に行った
- 4: 予習はしたが復習はあまりしなかった
- 3: 予習はあまりしなかったが復習はした
- 2: 予習も復習もあまりしなかった
- 1: テスト前にしか勉強しなかった

2年生4月

	5	4	3	2	1	合計人数
90%以上	0	0	0	1(33.3%)	2(66.7%)	3人
89～70%	0	7(63.6%)	0	0	4(36.4%)	11人
69～50%	2(5.7%)	16(45.8%)	9(25.7%)	4(11.4%)	4(11.4%)	35人
49～30%	0	7(24.1%)	0	6(20.7%)	16(55.2%)	29人
30%未満	0	2(50%)	0	1(25%)	1(25%)	4人
合計人数	2人	32人	9人	11人	27人	81人

【表3-2】Q3 2年生になった時、予習→授業→復習→予習→授業→復習……のサイクルを身に着けることが大切だと言いました。2年生前半の英語の授業を振り返って、この習慣は身に付きましたか。

2年生10月

	5	4	3	2	1	合計人数
90%以上	2(40%)	2(40%)	0	0	1(20%)	5人
89～70%	6(24%)	14(56%)	1(4%)	2(8%)	2(8%)	25人
69～50%	4(11.1%)	26(72.2%)	2(5.6%)	3(8.3%)	1(2.8%)	36人
49～30%	0	10(83.3%)	0	2(16.7%)	0	12人
30%未満	0	0	0	0	0	0人
合計人数	12人	52人	3人	7人	4人	78人

【表3-3】Q3 2年生になった時、予習→授業→復習→予習→授業→復習……のサイクルを身に着けることが大切だと言いました。2年生の英語の授業を振り返って、この習慣は身に付きましたか。

2年生2月

	5	4	3	2	1	合計人数
90%以上	4(100%)	0	0	0	0	4人
89～70%	6(20.7%)	16(55.2%)	3(10.3%)	1(3.5%)	3(10.3%)	29人
69～50%	7(20%)	25(71.4%)	2(5.7%)	0	1(2.9%)	35人
49～30%	0	9(90%)	1(10%)	0	0	10人
30%未満	0	0	0	0	0	0人
合計人数	17人	50人	6人	1人	4人	78人

4) 2年生の英語の授業(4, 10月の質問紙) / 3年生の英語の授業(2月の質問紙)で力をつけたい項目について

授業の理解度が「90%以上」の層での推移を見ると、年間を通じて、「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」の4項目すべてにおいて、ほぼ全員が「とても力をつけたい、力をつけたい」と回答している。授業の理解度が「89～70%」と「69～50%」の層では、年間を通じてほぼ同じ傾向が見られ、「音読」「文法力」「読解力」

「コミュニケーション力」の4項目すべてにおいて、「とても力をつけたい、力をつけたい」と回答している生徒が大部分である。授業の理解度が「49～30%」の層での推移は、4月では、「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」の4項目すべてにおいて、「普通、あまり力をつけなくてもよい」と回答している生徒が「読解力」92%～「音読」73%であった。10月には、この4項目において、「とても力をつけたい」「力をつけたい」と答える生徒がそれぞれの項目で「音読」83%～「読解力」100%になっており、2月には、ほぼ全員が4項目すべてにおいて「とても力をつけたい、力をつけたい」と回答している。授業の理解度が「30%未満」の層では、4月では4項目すべてにおいて、「文法力→普通(1人)」以外の全項目で「とても力をつけたい、力をつけたい」と答えており、10月2月では、授業の理解度が「30%未満」の層は1人もいなくなった。(表4-1, 2, 3参照)

【表4-1】Q4 2年生の英語の授業で力をつけたいと思うことは何ですか。

5:とても力をつけたい 4:力をつけたい 3:普通
2:あまり力をつかなくてもよい 1:力をつけなくてもよい

	音読	文法力	読解力	コミュニケーション力
90%以上 (3人)	5 2 4 1 3 0 2 0 1 0	5 3 4 0 3 0 2 0 1 0	5 2 4 1 3 0 2 0 1 0	5 2 4 1 3 0 2 0 1 0
89～70% (11人)	5 3 4 4 3 3 2 1 1 0	5 4 4 6 3 1 2 0 1 0	5 5 4 6 3 0 2 0 1 0	5 4 4 4 3 3 2 0 1 0
69～50% (35人)	5 10 4 20 3 5 2 0 1 0	5 21 4 13 3 1 2 0 1 0	5 25 4 9 3 1 2 0 1 0	5 15 4 16 3 4 2 0 1 0
49～30% (26人)	5 4 4 3 3 14 2 5 1 0	5 1 4 3 3 9 2 12 1 1	5 1 4 1 3 9 2 15 1 0	5 1 4 2 3 13 2 10 1 0
30%未満 (4人)	5 3 4 1 3 0 2 0 1 0	5 2 4 1 3 1 2 0 1 0	5 3 4 1 3 0 2 0 1 0	5 2 4 2 3 0 2 0 1 0

5) 2年生の英語の授業(4月は1年の英語の授業)で力がついた項目について

授業の理解度が「90%以上」の層での推移を見ると、4月では、「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」の4項目すべてにおいて、「とても力がついた、力がついた、普通」と回答している。10月と2月には、4項目の中で、「文法力」「読解力」の2項目では「とても力がついた」「力がついた」にシフトしている。「音読」と「コミュニケーション力」には、10月と2月に、ややばらつきが見られ、特に「音読」「文法力」「読解力」はばらつきが大きい。授業の理解度が「89～70%」の層では、4月の時点では「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」の4項目すべてにおいて、「力がついた、普通」と回答している生徒が大部分であったが、10月には、「音読」「文法力」「読解力」で「とても力がついた、

【表4-2】Q4 2年生後半の英語の授業で力をつけたいと思うことは何ですか。↓

	音読	文法力	読解力	コミュニケーション力
90%以上 (5人)	5 3 4 0 3 2 2 0 1 0	5 3 4 1 3 1 2 0 1 0	5 4 4 0 3 1 2 0 1 0	5 3 4 0 3 2 2 0 1 0
89～70% (25人)	5 7 4 14 3 4 2 0 1 0	5 21 4 4 3 0 2 0 1 0	5 18 4 7 3 0 2 0 1 0	5 12 4 12 3 1 2 0 1 0
69～50% (36人)	5 8 4 17 3 11 2 0 1 0	5 24 4 12 3 0 2 0 1 0	5 26 4 10 3 0 2 0 1 0	5 16 4 12 3 8 2 0 1 0
49～30% (12人)	5 4 4 6 3 2 2 0 1 0	5 9 4 2 3 1 2 0 1 0	5 8 4 4 3 0 2 0 1 0	5 8 4 3 3 1 2 0 1 0
30%未満 (0人)	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0

【表4-3】Q4 3年生の英語の授業で力をつけたいと思うことは何ですか。↓

	音読	文法力	読解力	コミュニケーション力
90%以上 (4人)	5 1 4 2 3 1 2 0 1 0	5 4 4 0 3 0 2 0 1 0	5 3 4 1 3 0 2 0 1 0	5 2 4 2 3 0 2 0 1 0
89～70% (29人)	5 10 4 14 3 4 2 1 1 0	5 25 4 4 3 0 2 0 1 0	5 27 4 2 3 0 2 0 1 0	5 13 4 11 3 5 2 0 1 0
69～50% (35人)	5 9 4 22 3 4 2 0 1 0	5 29 4 5 3 1 2 0 1 0	5 28 4 6 3 1 2 0 1 0	5 11 4 19 3 5 2 0 1 0
49～30% (10人)	5 4 4 5 3 1 2 0 1 0	5 8 4 2 3 0 2 0 1 0	5 7 4 3 3 0 2 0 1 0	5 3 4 6 3 1 2 0 1 0
30%未満 (0人)	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0

力がついた」生徒が目立ってきている。特に「音読」は、「とても力がついた」生徒は2月も10月とほぼ同じ傾向が見られ、「コミュニケーション力」に「あまり力がつかなかった」と回答する生徒がいる。授業の理解度が「69～50%」の層と「49～30%」の層では、年間を通じてほぼ同じ傾向が見られる。「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」の4項目すべてにおいて、4月→10月→2月と授業の進行と共に、「とても力がついた、力がついた」と回答している生徒が増加している。同時に、「普通、あまり力がつかなかった、力がつかなかった」と回答する生徒は減少している。しかしながら、「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」の3項目については、2月の時点でも「あまり力がつかなかった」と回答する生

徒がやや目立っている。授業の理解度が「30%未満」の層では、4月では「音読」は25%の生徒、「文法力」「コミュニケーション力」は75%の生徒、「読解力」は100%の生徒が「力がつかなかった」と答えている。10月、2月はこの層の生徒はいなくなった。

(表5-1, 2, 3参照)

6) 「音読」「文法」「読解」「コミュニケーション」の力をつけるために自分が行いたい努力(4月) / 行った努力(10月、2月)について

「音読」4月: 「大きな声でしっかりと読む」「予習復習のときに音読する」「本文を何回も読む」

10月: 「難しい発音やアクセントの単語を重点的に練習してから読むようにしている」「ペア読みのときに相手に分かりやすいような音読を心がけた」「家庭学習で本文を暗記するくらい何回も読んだ」「先生の読みを真似るようにした」

2月: 「文章の意味を考えながら、かつスムーズに読めるように何度も読んだ」「授業中の音読のときに真剣に取り組んだ」「単語の発音やアクセントを意識して読む」

「ペアの人の発音や読みに注意しながら自分の音読を意識した」「大きな声で発音に注意して読むようにした」「家で大きい声で何度も読んだ」

「文法」4月: 「覚える」「文法をしっかりと頭に入れる」「授業中にしっかりと先生の説明を聞き、ノートにまとめる」

「Next Stage(学校で一括購入している文法・語法の問題集)をやる」「予習・復習をしっかりとやる」

10月: 「復習プリントをしっかりとやった」「文法項目毎に例文を1つ覚えた」「Next stageを計画的に復習した」「授業で習った文法を復習プリントで確認、問題集を解いた」

2月: 「分からないことが出てきたら、復習プリントの再確認」「授業で教わったことを復習プリントで復習し、テスト前に再度復習した」「何となくやるのではなく、大切なポイントを自分でまとめながら解くようにした」「動詞や助動詞の使い方に気をつける」

「読解」4月: 「単語の力をしっかりとつける」「単語や熟語を覚える」「教科書を読む」「なるべくたくさん読む」「予習」

10月: 「予習プリントを見て大まかな流れをつかんでから読んだ」「予習プリントのTFクイズでだいたいの流れをつかんで、初見ではなるべく辞書を引かずに内容をつかむようにした」「文型を確認しながら読んで訳した」「どうすれば理解しやすいかを考えながら読んだ」

2月: 「問題を解きながらどこに注目して読めばいいかを考えて、できるだけ短い時間で読めるように心がけた」「最初からピリオドまでの一文をできるだけ意味をつなげて訳すように心がけた」「模試等に出てくる長文を読み返した」「主語が何なのかをきちんと見つけるようにした」「単語だけではなく、熟語や構文に注意して読むようにした」

「コミュニケーション」4月: 「授業以外でも英語を話す機会を増やす」「ALTの先生に自分から積極的に話しか

【表5-1】Q5 1年生の英語の授業で力がついたと思うことは何ですか？

	音読	文法力	読解力	コミュニケーション力
90%以上 (3人)	5 2 4 0 3 1 2 0 1 0	5 1 4 1 3 1 2 0 1 0	5 1 4 1 3 1 2 0 1 0	5 0 4 2 3 1 2 0 1 0
89~70% (11人)	5 0 4 4 3 6 2 1 1 0	5 1 4 3 3 7 2 0 1 0	5 2 4 2 3 7 2 0 1 0	5 0 4 3 3 7 2 1 1 0
69~50% (35人)	5 1 4 18 3 12 2 4 1 0	5 1 4 10 3 21 2 3 1 0	5 0 4 11 3 22 2 2 1 0	5 1 4 8 3 18 2 8 1 0
49~30% (29人)	5 3 4 5 3 16 2 5 1 0	5 0 4 4 3 10 2 13 1 2	5 0 4 2 3 10 2 16 1 1	5 0 4 3 3 14 2 11 1 1
30%未満 (4人)	5 0 4 2 3 1 2 1 1 0	5 0 4 0 3 1 2 3 1 0	5 0 4 0 3 0 2 4 1 0	5 0 4 1 3 0 2 3 1 0

【表5-2】Q5 2年生前半の英語の授業で力がついたと思うことは何ですか？

	音読	文法力	読解力	コミュニケーション力
90%以上 (5人)	5 3 4 1 3 1 2 0 1 0	5 3 4 2 3 0 2 0 1 0	5 2 4 3 3 0 2 0 1 0	5 2 4 0 3 1 2 1 1 1
89~70% (25人)	5 8 4 11 3 6 2 0 1 0	5 2 4 20 3 3 2 0 1 0	5 3 4 14 3 8 2 0 1 0	5 0 4 8 3 14 2 3 1 0
69~50% (36人)	5 3 4 21 3 12 2 0 1 0	5 2 4 9 3 24 2 1 1 0	5 3 4 15 3 16 2 2 1 0	5 0 4 8 3 21 2 7 1 0
49~30% (12人)	5 2 4 6 3 2 2 2 1 0	5 0 4 1 3 8 2 3 1 0	5 0 4 3 3 7 2 2 1 0	5 0 4 4 3 5 2 3 1 0
30%未満 (0人)	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0

【表5-3】Q5 2年生の英語の授業で力がついたと思うことは何ですか？

	音読	文法力	読解力	コミュニケーション力
90%以上 (4人)	5 1 4 2 3 0 2 1 1 0	5 1 4 3 3 0 2 0 1 0	5 3 4 1 3 0 2 0 1 0	5 0 4 2 3 1 2 1 1 0
89~70% (29人)	5 10 4 15 3 4 2 0 1 0	5 4 4 15 3 10 2 0 1 0	5 4 4 17 3 7 2 1 1 0	5 2 4 10 3 13 2 4 1 0
69~50% (35人)	5 5 4 21 3 9 2 0 1 0	5 0 4 21 3 13 2 1 1 0	5 2 4 18 3 13 2 2 1 0	5 2 4 11 3 18 2 4 1 0
49~30% (10人)	5 2 4 8 3 0 2 0 1 0	5 0 4 3 3 6 2 1 1 0	5 0 4 3 3 4 2 3 1 0	5 0 4 2 3 7 2 1 1 0
30%未満 (0人)	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0

かける」「文法や単語をきちんと覚える」

10月：「ペアで読む時に、ただ読むのではなく、抑揚をつけたり、普通の会話でも使えるような英語のリズムを意識した」「(ふざけながらですが)友人と英語で会話(°^°)」「友人や家族と英語で話をしたりした」「ペア読みなどを積極的に行うこと」

2月：「授業中に英語で自分の意見を言う場が1年生のときより増えたので、それらにしっかり取り組んだ」「友達などと英語で簡単なやりとりをした」「顔を上げて話せるように努力した」「早口にならないように気をつけた」「以前より頑張ってALTに話しかけた」「ペアワークなどですらすら話せるように心がけた」

7) オリジナルプリントについて

授業の理解度毎のどの層においても、10月、2月共に、ほぼ全員が「かなり効果的、効果的」と回答している。(表6参照)

【表6】Q6 授業で配布している復習プリントは、英語学習を進めるうえで効果的でしたか。〃

5：かなり効果的 4：効果的 3：普通
2：効果的でない 1：かなり効果的でない〃

2年生10月	
理解度	プリント
90%以上 (5人)	5 3 4 2 3 0 2 0 1 0
89~70% (25人)	5 12 4 11 3 2 2 0 1 0
69~50% (36人)	5 9 4 24 3 3 2 0 1 0
49~30% (12人)	5 3 4 9 3 0 2 0 1 0
30%未満 (0人)	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0

2年生2月	
理解度	プリント
90%以上 (4人)	5 3 4 1 3 0 2 0 1 0
89~70% (29人)	5 15 4 12 3 2 2 0 1 0
69~50% (35人)	5 14 4 21 3 0 2 0 1 0
49~30% (10人)	5 2 4 8 3 0 2 0 1 0
30%未満 (0人)	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0

8) ペア読みやペアQuestions & Answersの練習について

授業の理解度が「90%以上」の層での推移を見ると、10月、2月ともに100%が「かなり効果的、効果的」と回答、そのほかの層では、10月→2月で、理解度「89~70%」では80%→93%、理解度「69~50%」では78%→80%、理解度「49~30%」では83%→100%の生徒が「かなり効果的、効果的」と回答している。(表7参照)

9) 3年生になってからの英語の勉強への頑張れ度合い(自己効力感)について

2年生2月の段階で、全生徒の50%に当たる39人が「90%以上頑張れる」と答えており、24人(30.8%)が「89~70%」、11人(14%)が「69~50%」、4人(5.2%)が「49~30%」頑張れるとそれぞれ答えている。「30%未満」と回答した生徒はいなかった。(表8-1参照)

それぞれの自己効力感の度合いと2月段階での生徒の理解度を比較すると、理解度「90%以上」の生徒の80%、理解度「89~70%以上」の生徒の78.6%、理解度「69~

【表7】Q7 授業で行っているペアワークは、英語学習を進めるうえで効果的でしたか。〃

5：かなり効果的 4：効果的 3：普通
2：効果的でない 1：かなり効果的でない〃

2年生10月	
理解度	ペアワーク
90%以上 (5人)	5 2 4 3 3 0 2 0 1 0
89~70% (25人)	5 7 4 13 3 5 2 0 1 0
69~50% (36人)	5 6 4 22 3 7 2 1 1 0
49~30% (12人)	5 3 4 7 3 2 2 0 1 0
30%未満 (0人)	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0

2年生2月	
理解度	ペアワーク
90%以上 (4人)	5 2 4 2 3 0 2 0 1 0
89~70% (29人)	5 12 4 15 3 2 2 0 1 0
69~50% (35人)	5 9 4 19 3 7 2 0 1 0
49~30% (10人)	5 3 4 7 3 0 2 0 1 0
30%未満 (0人)	5 0 4 0 3 0 2 0 1 0

【表8-1】Q8 3年生になってからの英語の勉強について、「自分は頑張れる、やれる」という気持ちの強さはどのくらいですか。〃

自己効力感	人数
90%以上	39 (50%)
89~70%	24 (30.8%)
69~50%	11 (14%)
49~30%	4 (5.2%)
30%未満	0 (0%)
合計人数	78人

【表8-2】

2月の理解度	自己効力感				
	90%以上	89~70%	69~50%	49~30%	30%未満
90%以上 (5人)	4(80%)	1(20%)	0	0	0
89~70% (28人)	22(78.6%)	4(14.3%)	2(7.1%)	0	0
69~50% (35人)	13(37.1%)	18(51.4%)	3(8.6%)	1(2.9%)	0
49~30% (10人)	0	1(10%)	6(60%)	3(30%)	0
30%未満 (0人)	0	0	0	0	0
合計人数	39人	24人	11人	4人	0人

~50%」の生徒の37.1%が、自己効力感「90%以上」と回答している。また、理解度「90%以上」の生徒の20%、理解度「89~70%以上」の生徒の14.3%、理解度「69~50%」の生徒の51.4%、理解度「49~30%」の生徒の10%が、自己効力感が「89~70%」と回答している。(表8-1, 2参照)

10) 2年生の授業 / 2年生後半の授業 / 3年生の授業で期待すること & やって欲しいことについて

4月：「分かりやすく教えて欲しい」「英語の様々な力を私たちに付けて欲しい」「楽しい授業にして欲しい」「入試で出やすいところや重要なところの説明」「雑談を交えながら楽しく」「読解の力をつけさせて欲しい」

10月：「やはり楽しい授業をお願いします。今は結構楽しいです」「このまま、今の授業を続けて行って欲しいです」「分かりやすいので、今まで同様をお願いします。」

2月：「長文読解など、入試対策をやってほしい」「今までよりも少し上のレベルの問題が解けるように、手助けをしてくれたら嬉しい」「3年生になって受験勉強が大変になるけれど、楽しい授業を続けて欲しい」「ALTとの授業を増やして欲しい」

11) 項目10番の要望に対して自分が取り組もうとしていることについて

4月：「授業について行けるようにしっかり予習したいです」「分からないところは先生に聞きに行く」「積極的に授業に参加する」「予習復習をしっかりする」「はじめに先生の授業を聞いて、テストではある程度以上の点数を取りたいです」

10月：「集中力を持って聞く。板書に集中しがちだが、説明をしっかり聞いて授業中の理解力を高める。復習を忘れない」「予習→授業→復習をしっかり行うように努力する」「苦手だから…と妥協しないようにする」「予習復習プリントをちゃんとやる」「今は予習しかできていないので、復習をしっかりできるように意識したいです」

2月：「予習復習をしっかりやり、英文を理解できるようにする」「語法・単語力をつけて、文を読んだ時に素早く理解できるようにする」「単語・英文法を早めに復習して、今までより入試を見据えて取り組む」「基礎固めをぬかりなく行い、授業でさらに理解を深めようと思っています」「春休みのうちから勉強を進めて、3年生で有意義に取り組めるようにしたい。授業の中でちゃんと理解できるようにしたい」

12) special corner について

4月：「1年間よろしくお願いします」「英語は苦手ですが、大学受験で失敗しないためにも頑張っていきたいと思います」「本当にあきらめるほど成績が悪い私ですが、英語が嫌いなわけではありません。頑張って勉強しますので、どうぞよろしくお願いします」「全力で英語を楽しんでいこうと思います」

10月：「授業がとても分かりやすく楽しいです。期末はもっと点数がとれるように頑張ります!! 残りの授業もよろしくお願いします」「3年ゼロ学期(2年3学期のこと)から、メリハリをつけて頑張ります」「先生の授業、すごく分かりやすいです!! これからもよろしくおねがいします」「やる気が出てきたので頑張ります」「テスト勉強はネクステをやってそれ以外何をすればよいか全然分かりません。教えてください」

2月：「若海先生の授業では、文の構造を理解することができたり、分詞構文などの苦手な文法も分かるようになりました(まだ完璧ではないです…)。来年も若海先生の授業が受けたいです」「若海先生の授業、分かりやすく良かったです(o^)。文法の話をよくしてくださるので、1年の内容とか熟語とか、思い出すことができます。ありがとうございました」「1年間ありがとうございました。先生は、いろいろなことに詳しくて、授業中にちょっとした話が聞けるのがいつも楽しかったです(o^)」

6 まとめと考察

今回の研究では、高校2年生における英語の授業実践を通して、予習→授業→復習サイクル及び授業におけるペアワークの「経験」に基づく学習習慣の確立を軸とした学習方略と授業の理解度から見た自己効力感の獲得との

関連について、検討してきた。

(1) 学習方略の有効性について

今回の質問紙調査に回答した生徒たちは全員、2年生になって初めて第1筆者の授業を受講した。従って、予習→授業→復習サイクルの確立やペアワークを中心とした授業デザインについては、4月に初めて第1筆者から伝えられた。

予習→授業→復習サイクルの確立については、「予習・復習を中心に行った」生徒の割合が、4月→10月→2月と授業が進むにつれ、2人(0.02%)→12人(15.4%)→17人(21.8%)と増加、「予習はしたが復習はあまりしなかった」生徒の割合が、「予習・復習を中心に行った」生徒同様、4月→10月→2月と授業が進むにつれて、32人(39.5%)→52人(66.7%)→50人(64.1%)と、4月から10月の時点で1.5倍強増加している。10月以降の大きな変動がないのは、10月時点で筆者の授業スタイルが生徒たちにほぼ定着しているからだと考える。「予習も復習もあまりしなかった」生徒、「テスト前にしか勉強しなかった」生徒の割合が、4月→10月→2月と授業が進むにつれて、38人(46.9%)→11人(14.1%)→5人(0.06%)と劇的に減少し、特に、理解度「49%~30%」では、「予習はしたが復習はあまりしなかった」に大幅にシフトしている。また、ペアワークについても、10月→2月で、全ての授業理解度層において「とても効果的、効果的」と回答した生徒たちが増加している。以上のことから、予習→授業→復習サイクルの確立およびペアワークを基本とした学習方略の有効性が確認できた。ただし、10月、2月共に、ほぼ全員が復習プリントについて「かなり効果的、効果的」と回答しているにもかかわらず、理解度「49%~30%」では、2月の時点で復習の習慣が身につけていない生徒がまだ90%もいることから、特に授業理解度の低い生徒たちの復習の定着への工夫が必要である。

(2) 授業の理解度から見た自己効力感の獲得について

3年生における英語学習への頑張り度合い(自己効力感)に関して、自己効力感が70%以上と答えている生徒は80.8%、その中で、自己効力感が90%以上と回答した生徒は50%であった。2月の授業理解度との関連で見ると、理解度が高いほど、自己効力感も高いことが分かる(表8-1, 2)。これらの生徒は、「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」への取り組み(力をつけたいこと/力がついたこと)についても、1年を通じて「とても力をつけたい(ついた)/力をつけたい(ついた)」にほぼ集中しており、「自立した学習者」(保坂2006)としての自覚が見られる。

授業理解度「49%以下」の生徒たちは、4月→10月→2月で40.3%(33人)→15.3%(12人)→12.8%(10人)と減少し、10月の時点で理解度「30%未満」は0人になった。2月には、理解度「49~30%」の生徒たち全員が2年生の授業を終えての英語の理解度は「上がった」と回答しており、3年生における英語学習への頑張り度合い(自己効力感)についても10人中7人が「80%~50%」と自己評価をしている。このことから、授業の理解度は未だ半分以下ではあるが、3年生になってから充分に頑張れるという自分なりの見通

し(自己効力感)を持っていることが分かる。それを裏付けるものが、「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」への取り組み(力をつけたいこと)の変化に読み取れる。具体的には、これら4項目について、4月には理解度「49%以下」の生徒たちのほとんどが「普通 / 力がつかなくても良い」と回答していたが、10月には「とても力をつけたい / 力をつけたい」にシフトし、2月もこの傾向は継続していることがあげられる。2年生での英語の授業を通じて、「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」と、具体的な目的意識を持たせた取り組みを促したことにより、英語学習への動機付けを促し、英語が苦手な生徒たちも、以前より英語学習に取り組みやすくなったと考える。

項目6の自由記述欄については、4月では、「とても力をつけたい、力をつけたい」と回答した生徒たちが主に記入していて、「普通、あまり力をつけなくてよい、力をつけなくてよい」生徒たちの記述はほとんどなかったが、10月、2月ではこれらの生徒たちの記述も見られるようになった。それと共に、4月→10月→2月と進むにつれ、記述の内容がより具体的になっていることが特徴的である。さらに、2月の自由記述欄には、「ペアの人の発音や読みに注意しながら自分の音読を意識した(音読)」「何となくやるのではなく、大切なポイントを自分でまとめながら解くようにした(文法力)」「問題を解きながらどこに注目して読めばいいかを考えて、できるだけ短い時間で読めるように心がけた(読解力)」「以前より頑張ってALTに話しかけた(コミュニケーション力)」など、4項目全てに積極的な意欲の現れを感じさせる記述が増え、どの層の理解度の生徒にも「やってみよう」「やればできる」という意識(自己効力感)が育っている、あるいは強くなっていることが考えられる。

保坂(2006)は、「受験学力向上のためにはメタ認知方略が有効」と述べているが、具体的な記述をするためには自己を客観視する必要性があり、4月→10月→2月での記述内容の変化から、生徒たちのメタ認知方略の芽生えが読み取れる。実際、本調査を実施した2クラスの4月当初のこの科目の成績は、A組が平均的、B組が平均をやや上回るものだったが、学年末には学年1位と2位の成績になった。1年間を通じて、生徒の授業理解度が向上する過程で、メタ認知方略の有効活用も同時に育まれ、さらにそれが成績向上に結び付き、自己効力感の向上に繋がっていくという相乗効果が生まれていると思われる。

保坂(2003)は、「高校2年生では、成績が悪い生徒よりも良い生徒の方がカウンセリングマインドを持つ教師を望む」傾向があるとも述べている。この背景には、成績の悪い生徒は「英語は苦手、嫌い、できない→先生に聞いても仕方がない、できないと思われたくない」と自分で決めつけてしまったり、英語の授業での経験や成功体験の不足があるのではないだろうか。その結果、「やりたくない→やらない」サイクルに陥ってしまう。予習→授業→復習サイクルに基づいた授業を組み立て、その中で「音読」「文法力」「読解力」「コミュニケーション力」のように、生徒に明確な

目的意識を持たせて英語学習に取り組ませたことで、成績が良い生徒はもちろん悪い生徒の動機づけへの可能性が広がり、生徒の意欲や自己効力感、授業理解度の向上に繋がった。また項目10～12のように、自分の考えを自由に書かせたり、10月には4月の質問紙の自由記述欄の部分について教員がコメントを入れたものを生徒にフィードバックし、自己分析をさせてから次の質問紙調査をすることを通じて、自己認知が深まり、教員への距離感が狭まったようである。2年生の時に勉強の仕方や学習方略を具体的に経験し、自己効力感を獲得することで、「3年生になって受験勉強への厳しい指導を望む(保坂2003)」がそれに耐えられなくなるリスクを減らし、「自立した学習者」(保坂2006)として受験勉強に立ち向かえるのではないかと期待している。

今後は、本研究対象生徒たちの高校3年生における変化についての追跡調査を行い、理解度が異なる層ごとへの有効な指導法、自己効力感が増す働きかけの開発も視野に入れて、研究を発展させたい。

引用・参考文献

- Albert Bandura 1995 SELF- EFFICACY IN CHANGING SOCIETIES Cambridge University Press ([邦訳] 本明寛・野口京子 2000 激動社会の中の自己効力 金子書房)
- Schunk,D.H. 1982 Effects of effort attributional feedback on children's perceived self-efficacy and achievement. Journal of Educational Psychology, 74, 548-556
- 中西良文 2004 成功/失敗の方略帰属が自己効力感に与える影響 教育心理研究,52,127-138
- 野口京子 1999 健康心理学 金子書房
- 廣森友人 2013 自立学習の処方箋：自立した学習者を育てる視点 中部地区英語教育学会紀要,42,289-296
- 保坂芳男 2003 理想的な英語教師像に関する実証的研究—普通科高校生と中学生の比較を通して 広島大学大学院教育学研究科紀要,第二部,52,127-133
- 保坂芳男 2006 普通科高校生の英語学習方略と成績との関係について 中部地区英語教育学会研究紀要,36,31-40
- 山中晃 2001 英語の授業中における自己評価の学習者動機への影響 (英語教育) 国際基督教大学学報 I-A, 研究教育43, 219-234
- 若海由美・尾崎啓子 2013 高校生の学校ストレスに関する自己効力感、コーピング様式が現実の行動・理想の行動に及ぼす影響—学年差の検討 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要,12,83-90
- 若海由美・尾崎啓子 2014 高校生2年生における自己効力感の形成について—英語学習の視点から 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要,13,121-128
- 若海由美・尾崎啓子 2015 高校生3年間における学習方略と自己効力感の獲得との関連—英語学習の視点から 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要,14,1-8